

自然と歴史

大山が最初に登場するのは、8世紀の「出雲国風土記（出雲の郷土文化と伝説の記録）」の中の国引き神話です。これは、島根半島の形成を神話的な解釈で記述したものです。この物語では、神々の1人がこの国は狭く窮屈すぎると考え、海の向こうから切り離された土地を引っ張り、拡大することを決めました。大山は綱を結ぶ杭として使われました。この記録はまた大山が歴史上最古の神が住む山として書かれています。現在、大山には、西日本最大のブナ林があり、この山にちなんで名付けられた多くの独特な植物や昆虫が生息しています。登山道の最初の半分はブナの大きな林ですが、標高1300m付近からは、周囲が低木の茂みに変わり、標高1600m付近からは登山道が木道に続き、ダイセンキヤロボクの木々の中を通ります。登山者は山陰地方の最高峰である1729mの山頂から、壮大なパノラマを楽しめます。

保護活動

1965年以来、大山に上るハイカーの数が劇的に増えました。このことが、山頂付近での高山植物の踏みつけと植生の喪失をもたらしました。山の生態系を以前の姿に戻すため、「一木一石運動」を行っています。この運動では、頂上周辺に植えるための指定された苗と、浸食された斜面を安定させるための石をボランティアが山頂へ持っていきます。